

スコットランド併合後の国民意識形成における 「異質」の文化衝突

今井 裕美

本稿は、1707年のイングランドによるスコットランド併合（the Union）を中心に、その前後でいかにスコットランドおよびハイランドのイメージが恣意的に作られ政治的に利用されてきたか、そしてブリテン島の国民意識の形成に何が作用したのかを再考するものである。

18世紀初頭から19世紀半ばにかけて揺れ続けたスコットランドをめぐる歴史的背景を再確認し、スコットランドの独自性がいかに政治的・文化的に特殊な位置づけをされてきたかを探る。特に、*Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1992) を著したリング・コリーや、前者と対照的な視点から論じるジュリエット・シールズの *Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820* (2010) を援用しながら、国民意識の政治的意義やその形成における重要要素の検証を試みるものである。

1. 英国の国民意識

2016年、デビッド・キャメロン第75代英国首相（在任2010年5月11日～2016年7月13日）により実施され、「ブレグジット」すなわちEU離脱を方向づけた国民投票以来、英国は政治的混乱を続けている。保守党政権が引き続くなか、テリーザ・メイ首相（在任2016年7月13日～2019年7月24日）からボリス・ジョンソン首相（2019年7月24日～）へと交代劇が起こるが、政府の意向と議会、そして民意との間で方向性が合致せず、その後もしばらく政治的混乱が継続した。

これらの動きにおいて無視してならないのは、欧州懐疑主義とでも呼ぶべき根強い島国的国家観や国粹主義が根底に存在している点である。島国である英国に政治的混乱や困難がもたらされる事態は、珍しいことではない。歴史的にヨーロッパ大陸からの侵略を受け続け、異国による王朝支配をたびたび許してきた。フランス・ドイツ・オランダなどの欧州各国の血筋が英国王室に入り込み、「異質」の存在による支配が生じるたび、逆説的に国家のアイデンティティが確認され、結果的に英国の国民意識の形成が促されてきた。このような経緯を考えれば、欧州に対する抵抗姿勢や懐疑主

義的な思考が国民の意識レベルにまで根深く浸透していても無理はないであろう。

しかし英国の場合、国民性や民族としての独自性・独立性は、むしろ国内における「統一問題」においてこそ問われ、ブリテン島内での軋轢と闘争こそが歴史的な課題となってきた。その典型例が、スコットランドとイングランドの間の併合 (the Union) の問題である。さかのぼること200年あまり、1707年にイングランドはスコットランドを正式に併合し、スコットランドは王室および議会を失った。文化的・政治的後進地とみなされていた18世紀初頭のスコットランドは、イングランドにとっては、言語も文化も宗教もイングランド様式に教化されるべき「他者」と位置づけられた。イングランドへの「同化」を強いられたスコットランドは、使用言語であったゲール語からイングリッシュを話せるようになるための教育が施された。

たとえば、「ブリティッシュネス (Britishness)」すなわち「イギリス国民らしさ」の認識に注目し、『イギリス国民の誕生 (*Britons: Forging the Nation 1707-1837*)』(1992) を著したリンダ・コリー (Linda Colley) は、スコットランドはイングランドにとって支配の対象であると同時に恐怖の対象でもあったと指摘している¹。そのイメージは、イングランドに娶られる「従順な花嫁」でもあり、またイングランドに抗い「腕力に勝る侵略者」でもある。後者のイメージは、クラン (氏族) 特有の忠誠心と闘争心あふれるハイランド地方の民、ハイランダーの特性を根拠としている。

また、ハイランドを中心にしたスコットランドの特性や伝統がいかに捏造されたかについては、エリック・ホブズボウム (Eric Hobsbawm) とテレンス・レンジャー (Terence Ranger) が著した『創られた伝統 (*The Invention of Tradition*)』(1983) で既に指摘されているとおりである²。イングランド政府による戦略的イメージ作りにより、いかに国家・民族としてのスコットランドの印象が恣意的に形成されたかが綿密に論じられている。

その一方で、スコットランド自体は、イングランドとの関係において政治的圧力を受け続けるなか、武力や経済力ではなく、スコットランド啓蒙主義運動に象徴されるような知性や哲学・思想の力、そして科学力を以って自らの立ち位置を創り上げた。そして、スコットランドおよびハイランドが有する商業的利益や軍事力への貢献度をイングランドが認識し始めると、そのうまみを搾取する構造も顕在化し始める。同時にまた、コリーが指摘しているように、エジンバラやグラスゴーを中心に、スコットランド出身の有能な人材輩出と知的財産の蓄積により、対外的評価を向上させていったことも事実である。さらには、新大陸アメリカ・オーストラリア・カナダへの移住を果たし、結果的に知的遺産をグローバルに拡大した点も、アーサー・ハーマン (Arthure Herman, 2001) が既に指摘している³。

このように、スコットランドは、極端とも言えるイメージや特性を植え付けられる特殊な立場に置かれ続けている。はたしてこの現象は、英国の国民意識形成に関して何を示唆するものであろうか。

そこで以下では、18世紀初頭から19世紀半ばにかけて揺れ続けたスコットランドをめぐる歴史的背景を再確認し、スコットランドの独自性がいかに政治的・文化的に特殊な位置づけをされてきたかを探る。特に、前出のコリーや、前者と対照的な視点から論じるジュリエット・シールズ (Juliet Shields) の『感傷文学とアングロスコティッシュ・アイデンティティ 1745-1820 (*Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820*)』(2010) を参照しながら、英国国民のアイデンティティ

のあり方、そしてその形成における重要要素の検証を試みる。

2. 1707年スコットランド併合前後の歴史状況

英国の歴史上、スコットランドとイングランドの対立が顕在化するのには、1707年のスコットランド併合後のことである。スコットランド北部、ハイランド地方のクラン（氏族）を巻き込んだ一連のジャコバイトの乱がその典型例である。ジャコバイトとはジェームズという名のラテン語形ないしフランス語読み「ジェコブス」に由来し、ジャコバイトの直訳は「ジェームズ派」となる。ここで言うジェームズとは、1688年の名誉革命によって王位を奪われフランスへ亡命を図ったジェームズ2世を指す。議会と国王の対立が1649年のチャールズ1世の処刑という流血の結果を生んだのに対し、無血革命とも称される名誉革命は、絶対王政の終焉と立憲君主制の到来をもたらした。加えて、宗教的には英国国教会がカトリック教を許さないプロテスタント派であることを確認する機会となり、政治的にはスコットランド王朝の後ろ盾に相当するフランスへの対抗を意味した。

一方、国内の問題としては、この革命をきっかけに、正当な王位の継承を尊重しステュアート王朝復活を悲願する一派を生むことにもなった。その派閥による一連の反体制行動が、ジャコバイトの乱である。このような動きは、名誉革命完了直後から、ジェームズ2世およびその支援者による反撃として表面化していた。

革命の翌年1689年には、亡命したジェームズ2世自身がフランス王ルイ14世からの援軍を受け、アイルランドへ上陸しその全土を支配しかけた。だが、新国王ウィリアム3世自らが戦地に赴き、ダブリン近郊のボイン川の戦いに勝利し、ジェームズ軍はフランスへと出戻ることになった。その後、1691年にはアイルランドでのジャコバイトの抵抗が鎮められた一方、イングランド内でカトリック教徒への抑圧・弾圧が強まり、公職や法律職への登用や財産に関する制限が課された。その後、英国は対外問題も抱えることになり、対フランス戦争である第二次百年戦争に巻き込まれていった。国内においては、1696年にウィリアム3世自身の暗殺未遂事件も発生しており、嫡男が王位を継ぐ世襲制の原則が宗教上の理由に屈する形となった結果、当時の社会に騒動を呼び込むことになった。

以上が名誉革命直後の状況であるが、名誉革命によるその後への影響は穏やかなものではなく、18世紀半ばまで続く。とりわけ、1707年のスコットランドの併合以降、スコットランド王国復活を目論む動きが活発化し、1715年、1719年、1745年にジャコバイトの乱が勃発した。特に注目されるのが、名誉革命で国を追われたジェームズ2世の息子、自称ジェームズ3世（ジェームズ・フランシス・エドワード老僭王）の復位を掲げる1715年ジャコバイトの乱（The Fifteen）と、その子息であるチャールズ・エドワード・ステュアートを立て、再びステュアート王朝復活を目指す騒乱となった1745年の反乱（The Forty-five）である。

だが、前者の乱の実態は、当時の英国王ジェームズ1世に國務大臣を解任されたマー伯ジョン・アースキンによる逆恨みの反乱にすぎなかった。反体制勢力であるジャコバイトを利用し、9月6日に挙兵したマー伯軍がいったんスコットランド大半を制圧するも、11月13日にはシェリフミュアの戦いで政府軍に敗北を喫する。翌月に

なってから王位継承権を持つ主役、老僭王ジェイムズ3世がスコットランドに上陸するも時既に遅く、何ごとも成すことなく帰仏するという結果に終わった。

その後のイングランドでは、1720年南海泡沫事件以降の経済的混乱の收拾にあたった第一蔵卿のロバート・ウォルポールが、経済立て直しの舵を取っていた。「ウォルポールの平和」は1740年頃まで続くが、1745年のウォルポールの死によりイングランドの政治的安定性が失われた。すなわち、これを機会にステュアート王朝復活の悲願が再燃、The Forty-fiveこと1745年の乱では、ジェイムズ2世の孫にあたるチャールズ・エドワード・ステュアートがフランス王ルイ15世の支援をうけ、スコットランド上陸を果たした。その後、ハイランド地方の氏族を招集してイングランドへ侵攻し、ロンドンの北200km強のダービーにまで至るが、ジョージ2世の子息、若干25歳のウィリアム・アウグストゥス皇太子（カンバーランド公）の活躍により、カローデンの戦い（1746年4月16日）で決着がついた。「ボニー・プリンス・チャーリー」は退散を余儀なくされ、マクドナルド家のフィオーナの手助けにより、ベティ・バークという名で女装し、かろうじてブリテン島からの脱出を果たした。

それぞれの乱の思惑は異なるが、とりわけスコットランド王朝復活の鍵を握る張本人がイングランドに乗り込んできたThe Forty-five後は、スコットランドへの対応が大きく変化した。イングランドはとりわけハイランドに対する報復措置を強化し、その結果、ハイランド特有の文化破壊にまで踏み込む。具体的には、クランの首長の権限はく奪とクランの解散、クラン固有の格子柄のタータンおよびバグパイプ音楽の禁止を実行した。さらには、ハイランド人が所有していた土地を奪い、資本主義の世に適った農業の実践のため、ローランド出身の新しい地主たちに配分された。この措置は「ハイランド・クリアランス（放逐）」として、1810年から20年までの間に強行された。

ここで注意しておきたいのが、スコットランドは決して一枚岩ではなく、北方のハイランド地方とイングランドに隣接する南方のローランド地方とでは、互いに文化特性も社会システムも異なるという点である。ゆえにイングランドとの距離感も大いに違い、ローランド地方では早くからイングランド式の商業化を受け入れ、イングランドへの文化的・社会的同化も難なく進行した。一方、ハイランドは反体制のジャコバイトの乱に巻き込まれ、結果的にイングランドとの間で「内なる差異」をめぐる国内での民族対立問題の元凶となった。先述の「ハイランド・クリアランス（放逐）」は、イングランドによる直接的スコットランド支配を示す出来事だが、同時に、異なる特性を持つ複数民族を「ブリティッシュ」の名のもとに統合する必要性と困難とが共存する実情を露わにした。

3. 対スコットランドの「国民性」形成—コリーおよびシールズの見解

前節で言及したジャコバイトの乱は、宗教闘争の観点からすると、カトリック教の大国フランスとプロテスタント派のイングランドとの間の代理戦争であり、ジャコバイトに対する勝利が意味するのは、カトリック教を認めない英国国教会の姿勢の明確化である。旧教的要素を残しつつプロテスタントを標榜する英国国教会が、その都合のよい折衷主義の是非を問われた結果、大陸の旧教派閥と袂を分かつに至った。

一方、当時の政党間の勢力争い、つまり保守派のトーリー党と革新派のホイッグ党間の政争においては、トーリー党と王朝存続を望むジャコバイト派とを同一視させ、ともにネガティブな心象を与えることで与党ホイッグ党側が優勢を得ることとなった。特に責任内閣制に移行して以降、初代首相にあたるロバート・ウォルポールがカトリック的な熱狂と反乱要素をジャコバイトに結び付け、「政治的危険分子」として取り扱ったことが大きく影響していると言われる。

たしかに、このような史実をめぐる解釈を複数挙げるができるが、歴史解釈以前に注目すべきは、ジャコバイト派と同一視されたスコットランドおよびハイランド人に対して、どのようなイメージや心象が植え付けられたかである。

そこで、本節では特に「スコットランド」の表象に焦点をあて、文化的統制の側面において、いかにスコットランドらしさが観念的な操作を受けたかを確認する。特に、リンダ・コリーおよびジュリエット・シールズの見解を比較しながら考察を進める。

3-1 リンダ・コリーの見解

コリーは、ブリティッシュネスすなわち「イギリス国民らしさ」の形成に注目し、1707年のイングランドによるスコットランド併合からビクトリア女王即位の1832年までの間に、いかに「イギリス国民」という実体のない存在が形成されたかを分析している（Colley, 1992）。コリーの第一の研究目的は、外部からの脅威に対して既存の秩序を守りたいと考える人々が、自らのアイデンティティを何に求め、どのように思考し行動したのかを探ることにある。そして、第二の目的を、1707年から1832年までに形成された「国民意識」の醸成のされ方、その独特の帰属意識を明らかにすることとしている。この研究スタンスの根底には、「他者との折衝」という重要な概念が見られる。

歴史的事実も交えた詳細な分析の結果として挙げられるのが、1707年以降の対仏戦争がイギリスという国 = Nationの創造において重要な役割を果たしたという点である。そして、多くの文化的な差異にもかかわらず、プロテスタントイズムという共通の宗教的枠組みにより、イングランド人、ウェールズ人、スコットランド人のすべてを含めた「国民」としてのまとまりが可能になった点も強調されている。ドーヴァー海峡の向こう側から迫り来るフランスという「他者」との対峙こそが、国内での政治的・文化的なコンセンサス形成を飛び越すかたちで「イギリス国民」の意識を生み出した。単なる複数文化の統合や均質化ではなく、「他者 (the Other)」あつての現象であることを、コリーは次のように強調する。

The sense of a common identity here did not come into being, then, because of an integration and homogenization of disparate cultures. Instead, Britishness was superimposed over an array of internal differences in response to contact with the Other, and above all in response to conflict with the Other.”

(Colley 6) ⁴

イギリス人意識は、他者との接触の結果、とりわけ他者との紛争の結果であり、あらゆる「内部の差異」を超え、その上に重ねて焼きつけられたものと述べられている。

ここでは、長年の宿敵でもあるフランス、すなわち「カトリックという他者」が該当する。

3-2 ジュリエット・シールズの見解

一方、コリーの見解に相反するのが、シールズである。コリーの分析がグレートブリテン(Great Britain)全体の分析に終始し、イングランド・スコットランド・ウェールズも含めた具体的民族性の差異が事実上重視されていない点、そして前述の「自己」—「他者」の折衝によるアイデンティティ理論に依存しすぎている点をシールズは批判している(Shields, 2010)。これらの解釈上の偏りをただし、さらに新たな視点を取り入れようとするシールズが目にするのは、スコットランド人作家たちが見せるシンパシー(sympathy)すなわち「共感」の共有により形成される「コミュニティとしてのネイション=国家」という認識である。「他者」への恐怖といった心理学的反応とは異なる次元で「感情(feeling)」の機能をとらえ、感情表現が有する政治的示唆やその活用の様を探るあらたな英国の国民性研究の視点を掲げている。

したがって、シールズから見たコリー式の国民性研究は、政治の方策により民族的・地域的差異に関する妥協を大前提とする学説となる。新たな統一体にまとめあげることが最終ゴールとされるため、議論の前提に予定調和的な偏りが含まれる。したがって、「共有可能」なイギリス人意識(Britishness)を生み出す「土壌」、すなわち共有されてきた伝統・ふるまい・感情への視点が欠落する。その代わりにシールズが提供するのが、「感覚と共感(sensibilities and sympathy)」への注目である⁵。つまり、スコットランド人作家たちが目指す国民意識の形成が、「感情」を利用したものであると仮定し議論をすすめている。コリーと異なり、対仏戦争やプロテスタンティズムといった政治状況や宗教的対立の原理が単純に国民意識を形成するとは考えない。とりわけスコットランドの国民意識形成に関しては、「感性」や「共感」の機能にフォーカスすべきだとの見解をシールズは推す。

3-3 「スコットランドらしさ」のイメージの変遷

シールズによれば、「スコットランドらしさ」をめぐるイメージについては、1745年のジャコバイトの乱を境に変化があるとする。それ以前ではイングランドとスコットランドが分断され、前者は商業的な発展をもとに近代化された拡大主義をとる「自制のきいた男性性」が特色となる。それに対し、後者には牧歌的でいまだ封建制に従う後進性から「後れをとる女性性」が付されていたとする。しかし、The Forty-fiveの本格的な侵略後は、イングランド側の「不安」がベースとなり、スコットランドのイメージは「女性性=劣性」から「男性性=野蛮・暴力性」へとシフトしたとされる。「スコットランド=前近代的・商業性未発達・貧相国家のイメージ」(“Scotland as pre-modern, commercially undeveloped and impoverished,” 57-58)に加え、「粗野・狡猾・貪欲かつ性的に放埒な野蛮人」(“uncouth, cunning, greedy, and sexually promiscuous barbarians,” 58)のイメージの付加である。

そしてさらに、「野蛮人」から「感受性過多でメランコリックなスコットランド男性」へと変化が進む。注目すべきは、文化的後進性から文化的洗練の領域への転換の

原因が、18世紀後半以降のジャコバイトそのものの変容にあると論じている点である。つまり、ジャコバイトの政治的脅威が薄れた結果、過去のものとなったステュアート朝に対する保守的郷愁が生まれたと解釈されるからである。当時のイングランドが被っていた諸問題、工業化が貧富の差を拡大し、奴隷貿易などの社会悪をも含む重商主義への疑問や不満が、封建制的な理想社会に向けられた「保守的なノスタルジー」を後押ししたと考えられる。

そして、この新たな「センチメンタルでメランコリックに女性化されたスコットランド人イメージ」の形成に寄与したのが、ヘンリー・マッケンジーの『感情の人 (*The Man of Feeling*)』(1771)であるとシールズは論じる。

シールズの解釈によれば、18世紀後半における「泣き上戸なスコットランド人の男性性の形成」は、旧知の仲間への忠誠心やホスピタリティにあふれるハイランダーの特性に当てはまる表象となっている。それはちょうど、マッケンジーが著した『感情の人』の主人公ハーレーの特徴にも一致する。土地相続の交渉のため赴いたロンドン往復の旅において、不運な人々に遭遇しては憐憫の情も露わに落泪し、途中で出会った旧友との再会とその苦労話に号泣し、思いを寄せる女性との結婚も叶わず世を去るという人物像である。武力とは無関係な繊細で洗練された人物にも見えるが、そのイメージが示唆するのは、自身の感情をコントロールしきれない人物像であり、国を預かるような支配者の器には及ばないスコットランド人の姿である。シールズ曰く、洗練されたお上品で文化的なイングランド社会に参入できたように見えて、その実感情面の抑制が効かず、結果的に「スコットランド人は文明人不適合」という否定的評価が付されたとされる⁶。

コリー批判をしつつ「スコットランドらしさ」をめぐる議論を展開したシールズであるが、感傷小説の例として取り上げたヘンリー・マッケンジーについては、彼自身が刊行に関わっていた定期刊行物『ザ・ラウンジャー (*The Lounger*)』(1785-86)を援用しながら、マッケンジー自身の見解とその作品の受容において齟齬が見られる点を指摘している。

『ザ・ラウンジャー』はマッケンジーが発起人となり、複数の執筆者が持ち回り担当でエッセイ風の記事を執筆した週刊刊行物である。シールズが目にしたのは、「小説を読むことについて (“On Novel Reading”）」と題された感傷小説批判の文章である。作家としてはその作品の感傷性を批判されがちなマッケンジー自身が、「判断力を犠牲にするような感情」を指して以下のように否定している。

In the enthusiasm of sentiment there is much the same danger as in the enthusiasm of religion, of substituting certain impulses and feelings of what may be called a visionary kind, in the place of real practical duties, which, in morals, as in theology, we might not improperly denominate good works. ~ 中略 ~ This separation of conscience from feeling is depravity of the most pernicious sort; it eludes the strongest obligation to rectitude, it blunts the strongest incitement to virtue; when the ties of the first bind the sentiment and not the will, and the rewards of the latter crown not the heart but the imagination. (*The Lounger*, 20, *Saturday June 18, 1785*)⁷

マッケンジーが強調するのは、「寛容・慈愛・共感 (generosity, benevolence, compassion)」の重視である一方、価値を認められにくい二義的な徳、すなわち「正義・節制・効率性 (justice, prudence, economy)」を軽視する傾向への批判である。寛容の精神で互いに助け合うべきスコットランドではあるが、後者のような統括・管理につながる要素があってこそ慈愛や共感が適切に行使される。この点にこそ、イングランドとは異なる道徳的優位性が表れる。ゆえに、補完的であるべき「良心」と「感情」の分離、「判断」と「感受性」の分離の重要性こそが、マッケンジーの感傷小説批判の核であると強調している。つまり、過度の感傷性を持つ『感情の人』の主人公ハーレーは、自制を欠く反面教師としての表象であることを理解しなくてはならない⁸。この指摘は、従来のマッケンジー作品理解への修正であり、自己抑制の重要性を説き、感傷小説を危険視する作者自身の見解に合致することになる。また、作品を取り巻くコンテクストを取り入れた解釈としても注目すべきものである。

3-4 「スコットランドらしさ」形成における二つの歴史観

シールズは、先述のようなマッケンジーのテキスト分析以外にも複数の作家を取り上げ、当時の国民意識形成への影響を分析している。現実的に、18世紀半ば以降におけるスコットランドの文学界では、トーピアス・スモレット、ジェームズ・ボズウェルらの作品がスコットランドのイメージに感傷性や粗暴さ、民度の後進性を付加していた。

一方、18世紀末から19世紀早々にかけて盛んになった「オシアン論争」も、スコットランドの位置づけにかかわる重要な現象とみなしている。ハイランド地方で収集したゲール語による古い詩を英訳し、ジェームズ・マクファーソンが1760年から65年にかけて英雄物語詩を発表し、400年以上も前から洗練された文学作品が存在していた「事実」を以てハイランドの文化的優位性を遡及的に証明しようとした一件である。周知のとおり、断片詩集の存在そのものの真偽が問われ、長く問題作として取り沙汰されて来た。論争の核心は、文明度の低さを印象付けられていた異質の地スコットランドが、先進的なイングランドに勝る契機を見出したことにある。そもそもの発端はイングランドに対するスコットランドの独自性の探求であるが、存在の中核を時間を遡って起源に求めるのか、それとも進歩史観に則り現在の姿に求めるのかという、当時のロマン主義的思考においては重要な争点であった。とりわけ、文明の進歩を前提に革新主義をとるホイッグ的歴史観にとっては、過去に完成形を求める思想は警戒すべきものであった。当時のトーリー党対ホイッグ党の政治的駆け引きを考えれば、スコットランドの文明性をめぐる議論は、政治的にも影響力を持っていた。

4 まとめ—スコットランド表象と「異質」の文化衝突

ここまで、英国の国民性形成の中でも、とりわけ「内なる差異」が顕在化した1707年のスコットランド・イングランドの連合に注目し、その歴史的背景を踏まえ、国民性の形成がいかに政治的に操作されてきたかを確認してきた。特に、リンダ・コリーについては、諸要素が関連する国民性形成においては、外敵にしても国内の敵にしても、イングランドに「脅威を与える存在」への心理的反応が通底することを強調して

いた。また、歴史の流れからイメージの創出を読み取るコリーに対し、感情のレベルから国民意識形成を促すテキスト分析をベースに議論するシールズの独自性も確認できた。

これらの検証をもとに言えることは、感情の中でも「不安」や「反感」といった外的刺激へのいわば原始的な反応が、公的領域にある政治によって大いに利用されることと、小説を含めた文字媒体のテキストが、人々の国民意識の形成過程に深く関わるということである。

さらに、シールズがヘンリー・マッケンジーを例にして強調したように、共感や落涙による感傷性の強さが強調される作品は、主人公個人の特質にとどまらず、主人公が所属する集団の典型例として機能するという点である。スコットランドに対するイメージが従順性から攻撃性へと極端に揺れたように、マッケンジー作品が作者の意図に反して政治性を帯び、世論操作に利用された意味をあらためて認識する必要がある。一種のメディア操作による心象形成が、現代以上に影響力を持っていた事象として理解することもできるのではないだろうか。

異なる国家間においてのみならず、生活全般や社会システムの拠り所である常識や慣習が異なれば、異文化間の摩擦や衝突が生じる。その差異の衝突から、やがて異文化間の相互理解、そして多文化主義へと向かうためには、適切な自己理解および他者理解の双方が不可欠である。それは、たとえて言うならば、異文化間でとるべきコミュニケーションが、個々の違いを超越し、結果的に個々の存在が有する可能性の発揮を妨げない社会の構築を志向することに通じる。

英国の場合、地続きながら歴然と存在する各区域間の差異、すなわちイングランド、スコットランド、ウェールズそしてアイルランドとの間に横たわる異文化性は、時代ごとの政治事情により、いく度も争いの元となったと同時に、新たな国の様態を創造する契機にもなってきた。そして今もなおその折衝は継続している。

このたびの考察では、幅広くテキスト分析を行うことはできなかったが、今後のスコットランド研究や感傷小説の位置づけの再考に資する方向性の一端を垣間見ることができたと思われる。その根本にある、広義の異文化間の折衝・交渉の問題については、今現在の英国の政治的状況も見据えながら、建設的な思考の在り方を探る必要があるだろう。

*本原稿は、2018年12月1日（土）に山形大学小白川キャンパスにて開催された日本英文学会東北支部第73回大会、英米文学部門シンポジウム「モダニティの問題としての“dissociation of sensibility”を再考する」での発表、「スコットランド啓蒙主義におけるセンシビリティと【弱者】の感情作法」の一部に加筆したものである。

註

- 1 詳細は、リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』（2000）、「第3章 辺境」（110、123）を参照。
- 2 Eric Hobsbawm, Terence O. Ranger, *The Invention of Tradition* (Cambridge University Press, 1983) および翻訳版エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー『創られた伝統』（1992）参照。

- 3 アーサー・ハーマン『近代を創ったスコットランド人—啓蒙思想のグローバルな展開』（2012）参照。
- 4 コリーによる「他者」依存の自己形成原理については、Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1992) p.6 参照。
- 5 Juliet Shields, *Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820* (2010) p.2 参照。
- 6 Shields (2010) p.59参照。
- 7 原文テキストはIoan Williams編 *Novel and Romance 1700-1800: A Documentary Record* (2012) より引用したものである。
- 8 Shields (2010) p.71参照。

参考文献・参考資料

- リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔訳，名古屋大学出版会，2000。
長谷川輝夫，土肥恒之，大久保桂子『世界の歴史〈17〉ヨーロッパ近世の開花』中公文庫，2009。
アーサー・ハーマン『近代を創ったスコットランド人—啓蒙思想のグローバルな展開』篠原久，守田道夫訳，昭和堂，2012。
エリック・ホブズボウム，テレンス・レンジャー『創られた伝統』前川啓治，梶原景昭訳，紀伊國屋書店，1992。
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation, 1707-1837*. Second Edition. [Yale Nota Bene] New Haven and London: Yale University Press, 1992.
-----, *Acts of Union and Disunion*. London: Profile Books (GB), 2014.
Kamm, Antony. *The Jacobites*. Edinburgh: National Museums Scotland Enterprises Limited, 2000, 2009, 2013, 2017.
Herman, Arthur. *How the Scots Invented the Modern World: The True Story of How Western Europe's Poorest Nation Created Our World and Everything in It*. New York: Random House, 2001.
Shields, Juliet. *Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820*. [Cambridge Studies in Romanticism] Cambridge: Cambridge University Press, 2010.
Williams, Ioan. Ed. *Novel and Romance 1700-1800: A Documentary Record*. [Routledge Reviews] London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
Watt, Patrick and Waine, Rosie. *Wild and Majestic: Romantic Visions of Scotland*. Edinburgh: National Museums Scotland Enterprises Limited, 2019.
University of Nottingham: Manuscripts and Special Collections
[University of Nottingham Manuscripts and Special Collections Learning Resources: Conflict, 1745 Rebellion]
<https://www.nottingham.ac.uk/manuscriptsandspecialcollections/learning/conflict/theme2/introduction.aspx> (2019.9.1 取得).